

国家試験に数学と社会科を

前編



歯科医療者が制度の在り方を考える場合、様々なデータが必要になりますし、過去の歴史を振り返ることが大切なのですが、みんな感情ばかりが先走って、このことをなかなか真剣に聞いてはもらえません。また、誰も兎角目先の利益や経営の問題に囚われがちで、マクロな経済学の話なぞには至りません。その経済学なるものは、自然科学と違って、実験できないということが重視されます。それもその筈、社会全体を相手に大規模な人体実験をされては堪ったものではありません。だからこそ経済学においては統計学が発達したといわれますし、また歴史を振り返ることが重要とされます。

あなたにはあなたの思いがあるでしょうし、わたしにはわたしの思いがあります。

歯科医師が患者さんから或る思いを頂くこともあるでしょうし、また歯科技工士は歯科医師から別の思いを貰うこともあるでしょう。

しかし思いだけで確かな裏付けがないものを国民すべてが対象となる制度に適用しようとするには無理があります。

歯科の診療報酬はなかなか上がらないし、技工料も保険の補綴物に関しては極めて低い水準にあります。そしてこのままでは埒があかないからといって、歯科医療者から打開策として突拍子もないことが語られることだってあります。また何故か微に入り細を穿つような医療の質のことへと話は逸れていき、結果として社会科学の領域から逃走し、自然科学の中でも歯科医学という小さな要塞の中に立てこもることだってあります。

提言をはじめるのは、確かに歯科医療者かも知れません。しかしその提言を現実化するのは、制度として成立させるのは歯科医療者とは限りませんし、またそうでないことの方が多いでしょう。部外者を納得させるため、そして国民の代表者、代理人に訴え出るには、それなりのものを示す必要性があります。いつまで経っても話が噛みあわない、また理解してもらえないというのは、ひょっとすればこちらの持つ道具が不足しているからかも知れません。そこで何となく考えてみたのですが、国家試験に数学と社会科を必須にすればいいのかも分かりません。

それによって免許取得時には持つべき道具が得られているかも知れませんから。

いつまでも要塞の中に立てこもるといふのなら、話は別ですが。

つづく？

2010/05/14

みんなの歯科ネットワーク

